脱“戦後”の意欲と憧れが交錯する“ガラスの靴”

シューフィル　城（たち）　一（いっ）　生（せい）

「もはや戦後ではない」と経済白書が謳い、冷蔵庫・洗濯機・テレビが庶民憧れの“三種の神器”だった1950年代後半（昭和30年代初頭）、靴産業も戦後の混乱期を経て、変革と成長の時代を迎えつつあった。最も大きな影響を与えたのがセメンテッド（接着）製法と機械化で、大量生産・大量消費時代の波に乗り一気に普及し、産業の発展成長を加速させた。

内田製靴株式会社製作

そんな時代、1956年に企画製作され、57～58年に“ガラスの靴”としてヒットしたのが写真のハイヒール・サンダル（当時の表現）。現代だとケミカル素材使いのミュールといったところか。価格はどちらも一足3200円。当時、類似デザインのビニールサンダル（つっかけ）が一足100～200円、大卒国家公務員の初任給9200円ということを考えると破格の値段だ。製造した婦人靴メーカーが作るエレガンス・パンプスやサンダルの価格が2000円前後だったことから見ても、高級品でありファッション的にも最新の靴だった。革底、接着製法で、歩きやすさを補うために、ふまずの部分にはゴム編みテープを張り込み、足の屈曲に添うような工夫もされている。

そして、アッパーのポリ塩化ビニール、ヒールのプラスチックは戦後、石油化学の発達により次々に画期的なものが開発され、昭和30年代になり日用品などにも広く用いられるようになった当時の最新素材。靴用素材・パーツとしても利用され始めていた。数年前からパリ・ファッションなどでもオープン物パンプス、そしてサンダルが流行、その最新パターンとして合成樹脂や金属パーツを使ったサンダルや、写真のようなミュールが発表されていた。

さらに、戦後強くなったものの代表＝ナイロンストッキングが普及し始め、同じ1958年にはシームレス・ストッキングやタイツも発売されている。足元をすっきりと見せ、さっそうと街を歩く姿は当時の女性の憧れになっていた。それに加えて、1950年のディズニーアニメ「シンデレラ」の上映以来広まった”ガラスの靴”への夢が、透明で、キラキラ輝いている素材とデザインのパンプスやサンダルの流行につながっていったと思われる。

成長期にある靴業界・企業が積極的に素材・製品開発を行い、マーケット・アプローチし始めた記念碑的な靴である。

THE TOKYO SHOES PRESS

新製品

日ごとに、デザイン、色合などが変転しトップ・モードを追つてゆく婦人靴にあつて、まだまだ超モダンなハイヒールがお目見得した。このニュー・フェイスはうらら かな陽春から初夏にかけておシャレ 花にうけそうな女スツキリしたデザインのハイヒール・サンダルで、写真のごとくそのデザインにマッチしたメカニックなプラスチック・ヒールが特色。このプラスチック・ヒールは大阪の山工木型製作所の新製品で、硬度、個性なら明久度は木ヒールより遠かに強いとのことである。なおこのモード靴は内田製靴（荒川区南千住六二一）の製品。

新製品「プラスチックヒール・サンダル」を紹介する業界紙（「東京靴通信」1956年３月15日号）

当時の靴の流行を伝える新聞漫画（「東京靴通信」1957年２月15日号）